

尾袋遺跡（田尻地区）

2006

財団法人 山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター

尾袋遺跡（田尻地区）

2006

財団法人 山口県ひとつくり財団
山口県埋蔵文化財センター

序

本書は、一般県道下関川棚線緊急地方道路整備（道改）工事に伴い山口県の委託を受けて財団法人山口県ひとづくり財団が実施した、尾袋遺跡（田尻地区）の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する下関市吉見地区は多くの遺跡の存在が知られながらも、その詳細は不明なものが大半でしたが、今回の発掘調査によって弥生時代と中世の集落の一部が確認され、この地域に住んだ人々の営みを具体的に跡付けることができました。

本書が、文化財保護への理解を深め、学術研究や郷土の歴史を学ぶ資料として広く活用されることを願うものです。

最後に、調査の実施ならびに報告書作成にあたり、ご指導・ご協力いただいた関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

財団法人 山口県ひとづくり財団
理事長 村岡正義

例 言

- 1 本書は山口県下関市大字吉見下に所在する尾袋遺跡（田尻地区）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は一般県道下関川棚線緊急地方道路整備（道改）工事に伴い、財団法人山口県ひとつくり財団が山口県の委託を受けて実施したものである。
- 3 調査組織は次のとおりである。

調査主体 財団法人山口県ひとつくり財団 山口県埋蔵文化財センター
調査担当 文化財専門員 岩 崎 仁 志
文化財専門員 森 下 穂 雄
- 4 調査にあたっては、山口県教育委員会、山口県下関土木建築事務所、下関市教育委員会、下関市吉見土地改良区ならびに地元関係各位の協力・援助を得た。
- 5 本書の第1図は国土地理院発行の25,000分の1地形図「安岡」を複製使用したものである。
- 6 本書に使用した方位は国土座標（世界測地系）で示し、標高は海拔標高（m）である。
- 7 石材の鑑定については、山口県立山口博物館専門学芸員 亀谷 敦氏のご教示を得た。記して謝意を表したい。
- 8 本書に使用した土色の表記は下記に準拠した。

農林水産省農林水産技術会議事務局（監修） 『新版 標準土色帖』2004年
- 9 図版中の遺物番号は実測図の遺物番号と対応する。
- 10 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。

SB：建物跡 SK：土坑 SD：溝 SP：柱穴 SX：その他の遺構
- 11 本書に掲載した挿図・図版の作成および執筆は岩崎・森下が共同で行い、岩崎が編集した。

本文目次

1	遺跡の位置と環境	1
2	調査に至る経緯と調査の概要	3
3	調査の成果	7
1)	主な遺構	7
a)	弥生時代の遺構	7
b)	中世の遺構	8
2)	主な遺物	12
a)	弥生時代以前の遺物	12
b)	中世の遺物	15
4	まとめ	17
(付編)		
	尾袋遺跡(田尻地区)の土壌分析	19

挿図目次

第1図	尾袋遺跡（田尻地区）の位置と周辺の遺跡	1
第2図	尾袋遺跡（田尻地区）の調査範囲（1500分の1）	3
第3図	遺構配置図	5・6
第4図	弥生時代の土坑実測図	7
第5図	掘立柱建物跡実測図（1）	9
第6図	掘立柱建物跡実測図（2）	10
第7図	中世の土坑実測図	11
第8図	集石遺構（SX1）実測図	12
第9図	弥生時代以前の土器実測図	13
第10図	扁平打製石斧実測図	14
第11図	剥片・石核・石鎌実測図	15
第12図	中世遺物実測図	16
第13図	籾羽口実測図	17

図版目次

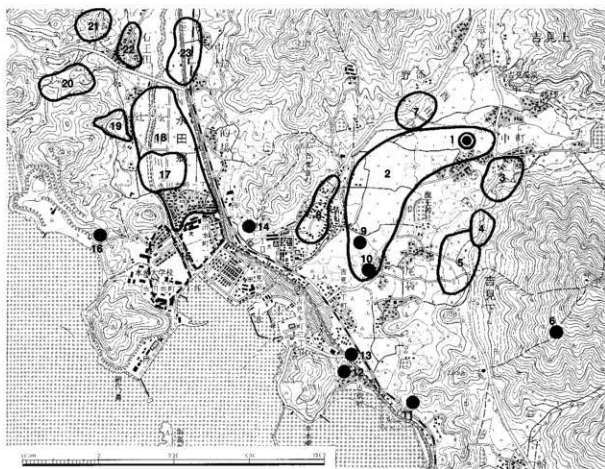
図版1	遺跡遠景（左上：北から、右上：東から、左下：南から、右下：西から）
図版2	遺跡完掘状況①（南半、上空から）
図版3	遺跡完掘状況②（北半、上空から）
図版4	遺跡完掘状況③（デジタル合成写真、上空から）
図版5	弥生時代の土坑①（SK2・SK3、上：北から、下：西から）
図版6	弥生時代の土坑②（上：SK2・SK3 上空から、下：SK5 東から）
図版7	掘立柱建物跡①（上：SB3・SB4 上空から、下：SB5 上空から）
図版8	掘立柱建物跡②（上：SB2 上空から、下：SB1 上空から）
図版9	中世の土坑①（上：SK6 北西から、下：SK1 北から）
図版10	中世の土坑②（SK4 上：北から、下：東から）
図版11	集石遺構（SX1 上：検出状況、下：完掘 いずれも南から）
図版12	弥生土器（SK2）
図版13	弥生土器・縄文土器（SK5・SK3・遺物包含層）
図版14	扁平打製石斧（SK2・SK5・遺物包含層）
図版15	扁平打製石斧・剥片・石核・石鎌（SP41・遺物包含層）
図版16	中世遺物①（SK4出土土器）
図版17	中世遺物②（SX1・SK6ほか）
図版18	その他の遺物（砥石・籾羽口・扁平打製石斧片）

1 遺跡の位置と環境

尾袋遺跡は下関市吉見下に所在する。遺跡の所在する下関市は本州の最西端に位置し、西は日本海の響灘、南は瀬戸内海の周防灘に面し、関門海峡を隔てて九州に向かい合う。吉見下地区は下関市の中心部から響灘に沿って約20km北上した地点で、東側には鬼ヶ城山から吉見峠を南下して龍王山に連なる山系が豊浦山地の一部を形成している。西側は響灘に面しており、西の網代の鼻と東の申本岬に囲まれ、南に開く吉見湾は波静かな入江を形成している。

吉見下地区は龍王山の北西麓及び鬼ヶ城山の南西麓の2つを水源とし吉見湾に注ぐ西田川および吉見川が形成するY字状の沖積平野を中心として拓かれ、本遺跡の所在場所は両河川の合流部付近にあり、海岸線から約1.5km北西に入った地点に位置している。

「吉見」の地名は「長門一宮住吉神社文書」中に、康暦元年（1379）11月、大内義弘が長門一宮住吉神社に吉見郷内の地を寄進したとする記述で初出する。また、「石清水文書」中に応永8（1401）年に前太政大臣足利義満が豊西部吉見郷地頭職都濃郡新屋河内地頭職を石清水八幡宮に寄付したとあり、遅くとも14世紀後半には「吉見」の地名が使用されていたと思われる。



- | | | | | |
|------------|----------|--------|-------|------------|
| 尾袋遺跡（田尻地区） | 尾袋遺跡 | 柴尾遺跡 | 下山田遺跡 | 宮ノ尾・上宮ノ尾遺跡 |
| 龍王山登山道遺跡 | 大森遺跡 | 里遺跡 | 樋ノ口遺跡 | 岩神古墳 |
| 大久保古墳群 | 古雷古墳群 | 小丸山石椋群 | 尾崎古墳 | 永田畑田跡 |
| 上越石椋 | 正吉郷入江塩浜跡 | 永田郷遺跡 | かじや遺跡 | 百可遺跡 |
| 榊尻遺跡 | 石王田遺跡 | 御堂遺跡 | | |

第1図 尾袋遺跡（田尻地区）の位置と周辺の遺跡

龍王山には古くから雨乞いの山として信仰され、上宮（頂上）、中宮（中腹）、下宮（海辺）の三社からなる大綿津見神社が祭られていた。安閑天皇の代に創建され乳授けの神として信仰がある乳母屋神社と大正6年（1917）に合祀され、今日の龍王神社と称するようになった。この乳母屋神社関係文書の中に、嘉暦2年（1327）の「物部武久請文」がある。この文書中に「富安名正古入江」という地名（17）で、現在の永田郷地区において日本最古とされる古式入浜式塩田操業の記録が残っている。この塩田は生産規模も余り大きくなく永くは続かなかったが、江戸時代に入ると再び入浜式塩田（15）として製塩が再開され、昭和34年まで存続した。現在、塩田跡の一部は吉見中学校及び水産大学校敷地となっている。また、縄文時代のものと思われる石鎌が宮の尾遺跡（5）と龍王山登山道（6）から発見されているが、詳細は現在のところ不明である。

吉見下地区では、上宮ノ尾遺跡（5）、下山田遺跡（4）、柴尾遺跡（3）などから弥生時代前期末～中期の土器片が多くの磨製の石鎌や石斧とともに出土している。また、樋の口遺跡（9）及び大森遺跡（7）からも磨製石斧が出土しており、この地域ではおそらくも弥生時代前期末には、稲作農業を中心とする生活形態が形成されたとみられる。

古墳時代になると、管玉等が出土した大久保古墳群（11）、刀、金環が出土した古宿古墳群（12）、金環が出土した尾崎古墳（14）、小丸山石棺群（13）が海岸沿いに築造されたが、そのほとんどは現在破壊若しくは消滅しており、わずかに出土品がその存在を示すのみである。

里遺跡（8）では弥生時代から近世にかけて、尾袋遺跡（2）では奈良時代から近世にかけての遺物が出土している。

吉見下地区の北西に接する永田郷地区では永田郷遺跡、御堂遺跡、上越石棺、埴尻遺跡、百町遺跡等が知られており、このうち御堂遺跡（23）は下関市教育委員会の発掘調査により縄文時代晩期前半の竪穴住居や木棺墓、弥生時代から中世にかけての建物跡や墓坑が数多く検出されており、吉見地区一帯における古代人の生活を知る上で貴重な資料を提供している。古墳時代の遺跡では上越石棺（16）が知られており、鉄刀片、鏡、玉類などが出土した。百町遺跡（20）、埴尻遺跡（21）では、古代の須恵器登窯跡が確認されており、遅くとも平安時代には須恵器がこの地域で生産されていたことを示している。石王田遺跡（22）、永田郷遺跡（18）は弥生時代から近世、かじや遺跡からは平安時代から近世にかけての集落跡が確認されている。

吉見下地区及び永田郷地区では、多くの遺跡・古墳の存在が確認されているにもかかわらず、御堂遺跡以外には詳細な発掘調査はなされていないため、この地域における古代史はほとんど解明されていない。今回の発掘調査は吉見下地区の古代人の生活を紐解く鍵となろう。

参考文献

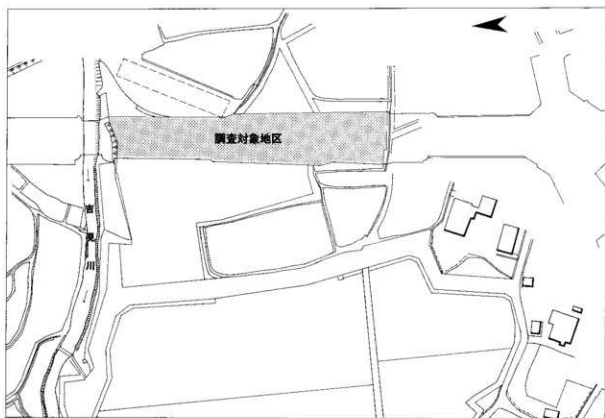
- 吉村次郎「原始・古代」（下関市史編集委員会編「下関市史 原始～中世」 下関市役所1965）
- 「よしみ」史誌編集委員会編「よしみ史誌」（下関市吉見公民館1985）
- 渡辺一雄「製塩」（下関市市史編集委員会編「下関市史 民族編」 下関市役所1992）
- 下関市教育委員会「御堂遺跡」（下関市教育委員会1991）

2 調査に至る経緯と調査の概要

今回発掘調査対象となった地点は調査前には水田として利用されており、1991年の『山口県遺跡地図』発行の段階では遺跡として認識されていなかった。この地点が遺跡として認知される契機となったのは平成2年度の下関市教育委員会による分布調査であり、その際に尾袋遺跡は南北約1km、東西300mほどの範囲におよぶ広大な遺跡とされた。そして発見の時点で尾袋遺跡は奈良～近世の遺物散布地として把握されることとなった。

この尾袋遺跡一帯を対象とする県営ほ場整備事業が計画されたことを受けて、平成14～16年度に山口県教育委員会によって施工に先立つ試掘調査が実施された。試掘調査の結果、遺跡範囲の数が所から中世の柱穴・土坑および土器類と弥生土器等が発見され、はじめて尾袋遺跡の具体像が明らかにされたが、事前調整の結果このほ場整備事業に伴う本発掘調査は回避された。なお、現在把握されている尾袋遺跡は広大な面積であるため、今回発掘調査対象とした地区については、小字名を付記して「尾袋遺跡（田尻地区）」と呼ぶこととなった。

今回の発掘調査は一般県道下関川棚線緊急地方道路整備（道改）工事に伴うものであり、これに先立ち、尾袋遺跡のうち県道建設予定範囲を対象として平成14～16年に山口県教育委員会による試掘調査が実施された。その結果、平成15年度の試掘調査によって今回発掘調査対象とした地点に弥生時代前期の溝または土坑と中世の柱穴が存在することが判明し、弥生土器を含む遺物包含層も確認された。これを受けて山口県教育委員会と山口県下関土木建築事務所との協議の結果、平成17年度に当該地区（2000㎡）を対象として発掘調査を実施することとなった。発掘調査は山口県の委託を受けて、財団



第2図 尾袋遺跡（田尻地区）の調査範囲（1500分の1）

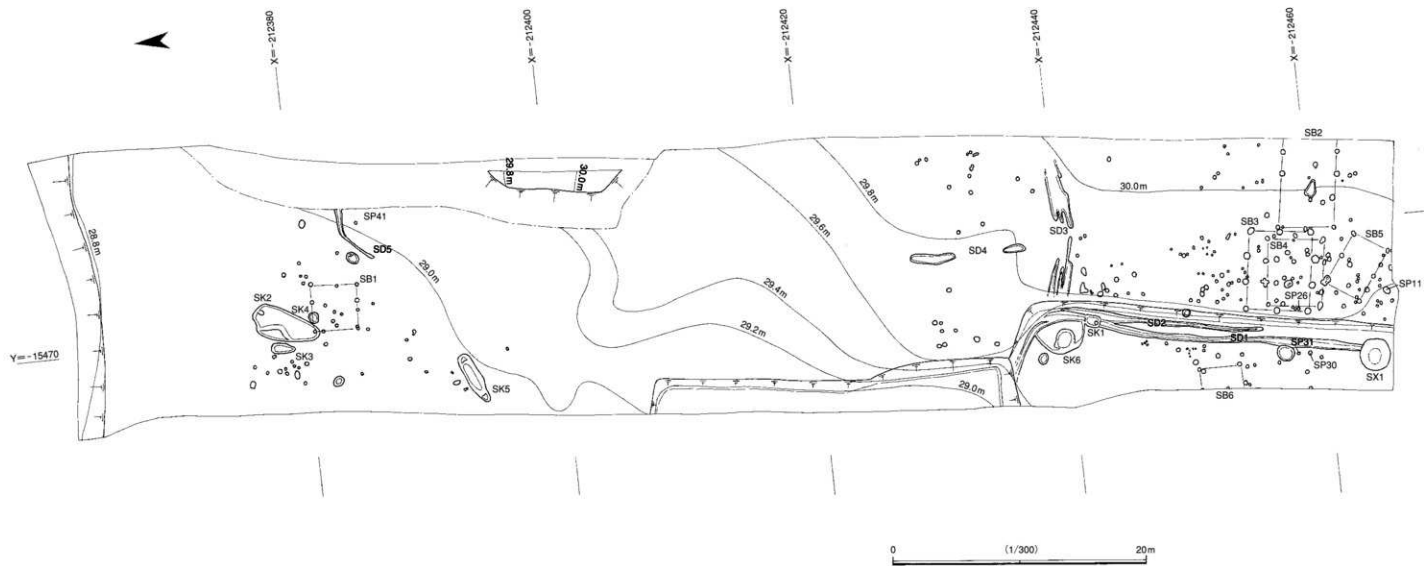
法人山口県ひとつくり財団山口県埋蔵文化財センターが実施することとなった。

現地における発掘調査は平成17年9月1日に着手した。調査事務所設置・発掘機材搬入ののち、雑草除去および処分や進入路整備等をおこないつつ、遺構面確認および除去土量把握のために試掘溝の設定・掘り込みを実施した。今回の事業においては調査対象地区からの土砂の場外搬出が不可能であるため、発掘調査に当たっては対象地区を南半部・北半部（約1000㎡ずつ）に分け、順次調査を実施することとなった。

10月3日、本格的な発掘調査はまず調査区南半部を対象として着手した。作業は重機による表土除去ののち、人力で遺構検出を行った。その結果、南端部分に遺構が集中し、北寄りには礫混じりの遺物包含層が堆積していることが判明した。遺構は中世の柱穴・土坑等で、弥生時代前期の土器片を多く含む遺物包含層の下層には遺構が存在しないことを確認した。その後遺構および遺物包含層掘り込みののち、遺構実測・写真撮影を行い、最後に第1回の空中写真撮影を実施して11月1日に南半部の調査を終了した。

引き続き北半部の調査を11月2日から開始した。南半部同様に重機による表土除去ののち、人力で遺構検出を行った。なお、表土除去に際しては周辺耕作地の水利への対応のため東側水路を確保せざるを得なかった。遺構検出の結果、遺構は南端部分の礫混じりの遺物包含層と北端部分の河川の氾濫に伴う礫層との間にはさまれて存在することが判明した。遺構分布は比較的疎らな状態であるが、中世の土坑・柱穴に加え、弥生時代前期の土坑が確認された。その後遺構掘り込みののち遺構実測、写真撮影を行い、11月24日に第2回の空中写真撮影を実施した。さらに遺物包含層掘り込みを行って11月30日に北半部の調査を終了した。

12月2日には調査事務所撤収・発掘機材搬出を行い、現地における調査を終了した。



第3図 遺構配置図

3 調査の成果

1) 主な遺構

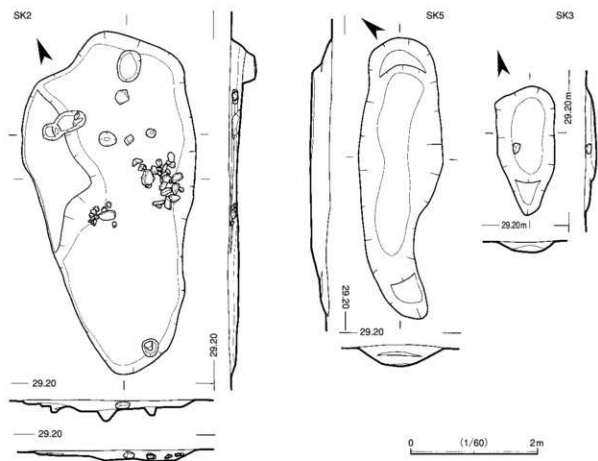
発見された遺構は調査区中央部の浅い谷地形に隔てられるかたちで、南北2地点に集中して存在する。これらの遺構は、弥生時代前期の一群と中世の一群に大きく分けることができる。前者は土坑が主体であり、調査範囲の北端部付近に集中するものの南半部には存在しない。これに対し、後者は掘立柱建物跡および柱穴が主体であり、南北両地点に分布する。

遺構の内訳は掘立柱建物跡6棟・土坑10基・溝5条・柱穴約280個・集石遺構1基である。なお、溝としたもの（SD1～5）は、いずれも近代以降の耕作に伴う水路の痕跡と考えられる。

a) 弥生時代の遺構

確実に弥生時代の遺構と認定できるものは、前期後半の土器を伴う大小3基の土坑（SK2・SK3・SK5）と柱穴1個（SP41）であり、調査区北端近くからのみ発見された。また、これら周辺の柱穴の一部もこの時期のものである可能性を有する。以下、各遺構について紹介する。

SK2（第4図、図版5・6） 調査地区内最大の土坑である。規模は長軸543cm、短軸274cmと大型であるものの、深さは最大で30cm程度である。埋土は暗褐色（7.5YR 3/3）粘質土の単層で、



第4図 弥生時代の土坑実測図

円鏢を含んでいる。埋土からは弥生時代前期後半の土器（第9図1～9）と扁平打製石斧（第10図23）が出土した。

SK3（第4図、図版5・6） SK2の西側に隣接して存在する、長軸200cm、短軸90cmの小型の土坑である。深さは最大でも15cm程度しかなく、埋土は褐色（7.5YR4/3）粘質土の単層である。埋土からは弥生時代前期後半の土器片が出土した。

SK5（第4図、図版6） 同時期の2基の土坑（SK2・SK3）から離れて単独で存在する溝状の土坑である。規模は長軸445cm、短軸134cm、深さ32cmで、東西両端の中段に小平坦面をもつ。埋土は褐色（7.5YR4/3）粘質土の単層であり、弥生時代前期後半の土器（第9図10～14）と扁平打製石斧（第10図21・22）が出土した。

SP41（第3図） 調査区北半部に存在する、直径25cmの小坑である。柱穴と考えられるが、建物を復元することはできなかった。埋土には安山岩製の石鏝未製品および石鏝折損品（第11図31・32）と剥片が含まれていた。

b) 中世の遺構

調査区内に存在する遺構の大半は中世の遺構であり、掘立柱建物跡6棟・土坑7基・集石遺構1基および柱穴がある。この期の遺構は、北部に薄く南部に厚い分布状況を見せる。柱穴数からみれば、北部：南部は約1：4.5という比率である。以下、各遺構について紹介する。

掘立柱建物跡

SB3（第5図、図版7） 3間×2間の建物で、棟方向は約N84°Wである。建物規模は桁行6.2m×梁行4.9m、床面積約30㎡である。柱穴の直径は36～56cm、深さは28～88cmである。SP23から土師器小片、SP21から瓦質土器摺鉢片・足鍋脚片、土師器杯片、SP24から李朝白磁碗片（第12図46）、SP19から瓦質土器足鍋片、青磁碗片、SP27から瓦質土器鍋片、SP17から瓦質土器摺鉢片（第12図48）、SP08から青磁碗片（第12図45）、SP04から土師器小片が出土している。

なお、SP23およびSP27には柱根が残存していた。

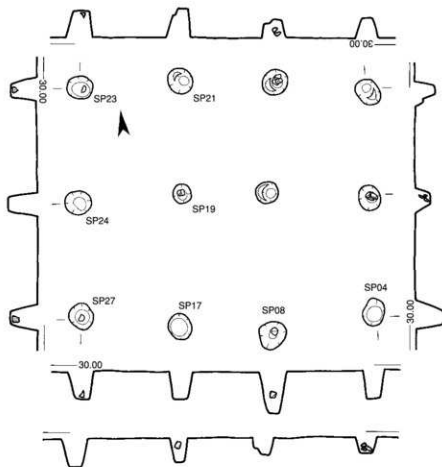
SB4（第5図、図版7） SB3に重なるように存在する3間×2間の建物で、棟方向は約N86°Wである。建物規模は桁行5.2m×梁行4.4m、床面積約23㎡である。柱穴の直径は20～68cm、深さは8～40cmである。SP35から15～16世紀のものと推定される土師皿片、SP20及びSP05から瓦質土器鍋片、SP16から瓦質土器足鍋脚片、SP03から土師器小片が出土した。

規模は異なるものの、SB4は柱穴配置および棟方向においてSB3と共通にする要素が多いことから、両者は建替えの関係にあるものとみられる。しかし、両者の柱穴の切合いは明確ではない。

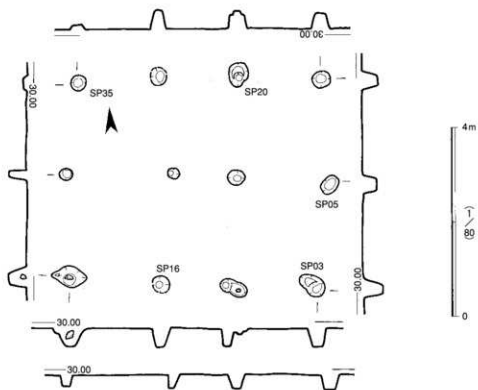
SB6（第6図） 調査区西辺に位置し、調査対象地域外に延びるため正確な規模は把握できないが、桁行2間以上×梁行1間（現況では1間×1間）、棟方向は約N79°Eである。建物規模は桁行3.4m以上×梁行3.3m、床面積約11㎡以上である。柱穴の直径は24～36cm、深さは12～52cmである。

SB2（第6図、図版8） 建物規模は桁行約6.0m以上×梁行約4.4m、床面積約26㎡以上で、3間以上×2間の建物である。調査区東方に延びる建物と考えられるため正確な規模は把握できない。棟

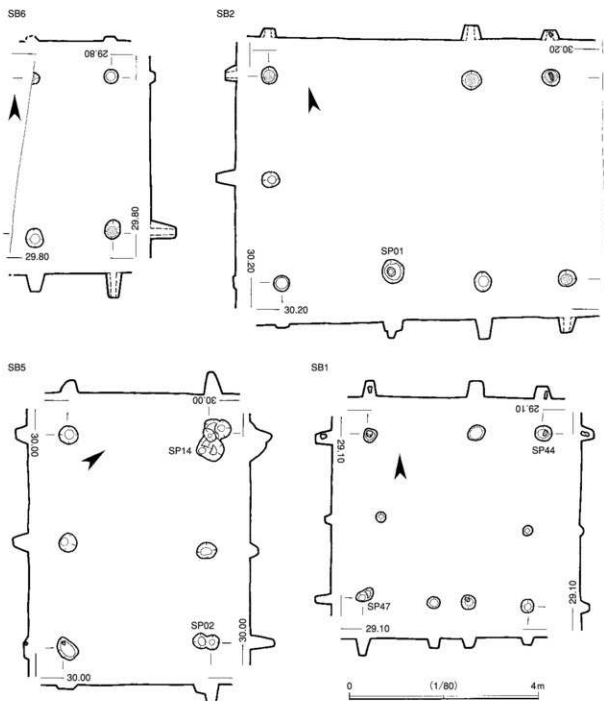
SB3



SB4



第5図 掘立柱建物跡実測図(1)



第6図 掘立柱建物跡実測図(2)

方向は約N80°Wであり、柱穴の直径は28～40cm、深さは8～44cmである。

SB5 (第6図、図版7) 2間×1間の建物で、棟方向は約N55°Wである。建物規模は桁行4.4m×梁行3.0m、床面積約13㎡である。柱穴の直径は28～44cm、深さは8～48cmである。SP14から瓦質土器足錫脚片(第12図52)、SP02から轆羽口片が出土した。

SB1 (第6図、図版8) 北半部で唯一復元できた建物である。2間×2間で、棟方向は約N86°Wである。建物規模は桁行3.7m×梁行3.5m、床面積13㎡である。柱穴の直径は20～32cm、深さは8～36cmである。SP44から土師器皿片、SP47から土師器小片が出土した。

土坑

SK 6 (第7図、図版9) 調査対象地区南半部西側に位置する不整形の浅い土坑である。SD 1・SD 2の掘削によって土坑東部輪郭は不明瞭となっている。規模は長軸388cm、短軸238cm、深さ18cmであり、埋土中から円礫とともに瓦質土器摺鉢(第12図43・44)が出土した。16世紀代の遺構と考えられる。

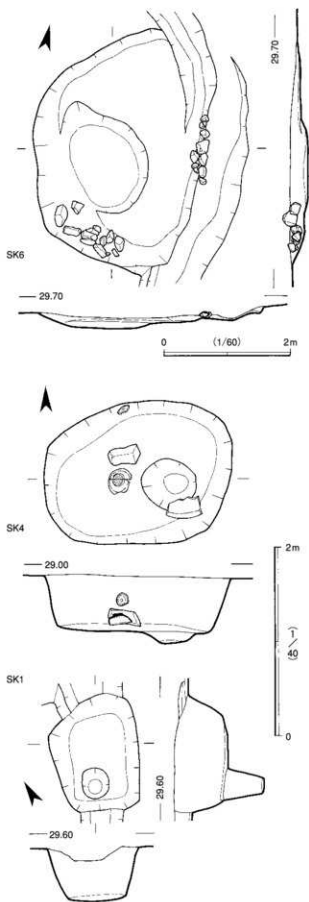
SK 4 (第7図、図版10) 調査対象地区北半部中央に位置する長円形の土坑である。規模は長軸196cm、短軸144cm、深さ75cm。埋土は暗褐色(7.5YR3/3)粘質土の単層であり、埋土中から土師器皿1・杯3・鍋1・砥石1(第12図34~39)が出土した。底面から完形に近い土師器杯が出土していることから、土坑墓の可能性を残す。

SK 1 (第7図、図版9) 隅丸長方形の土坑であり、SD 1によって切られている。規模は長軸120cm、短軸94cm、深さ56cm。底面南よりに小坑が存在する。中世の土坑と考えられるが、出土遺物がなため詳細な時期は不明である。

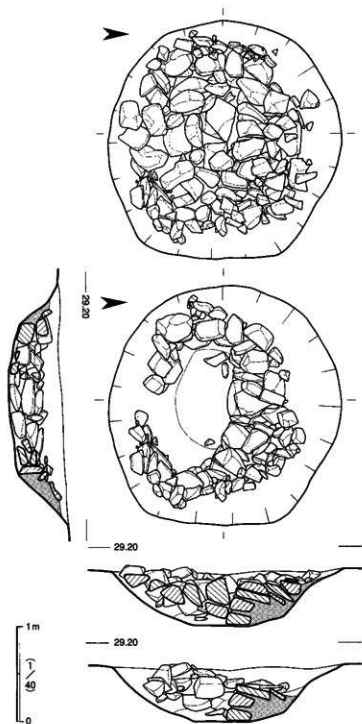
集石遺構

SX 1 (第8図、図版11) 礫の集積を伴う、直径約250cm、深さ約56cmのほぼ円形の土坑である。当初は埋め戻された石組み井戸と考えたが、原位置をとどめない礫を除去したところ、東西140cm、南北70~80cmの長方形に近い平面形の空間を形作る石組みが確認できた。南側では石組みを欠く部分があること、底面の掘削が湧水層に達していないことなどから、水溜め遺構であろうと判断した。

出土遺物には中国青花磁器皿(第12図40)、瓦質土器鍋および捕鉢片(第12図41・42)のほか、美濃焼碗片等も出土している。これらは上



第7図 中世の土坑実測図



第8図 集石遺構(SX1)実測図

もち、内面下部に貼付け突帯をもつ。11は無文である。

15はSK3出土の甕である。刻目・沈線をもたない。

16~20は遺物包含層から出土した遺物である。16は縄文時代後~晩期の鉢の一部と考えられる。19は口縁端部に円柱状の粘土帯を貼付けており、無文土器系の弥生土器とみられる。20は外面の底部付近に貝殻腹縁による沈線2条をもつ。

第10図21~27は赤色頁岩製の扁平打製石斧である。21・22はSK5、23はSK2、他は遺物包含層か

面集石の間から出土し、遺構下層からは遺物は出土していない。16世紀代の遺構と考えられる。

2) 主な遺物

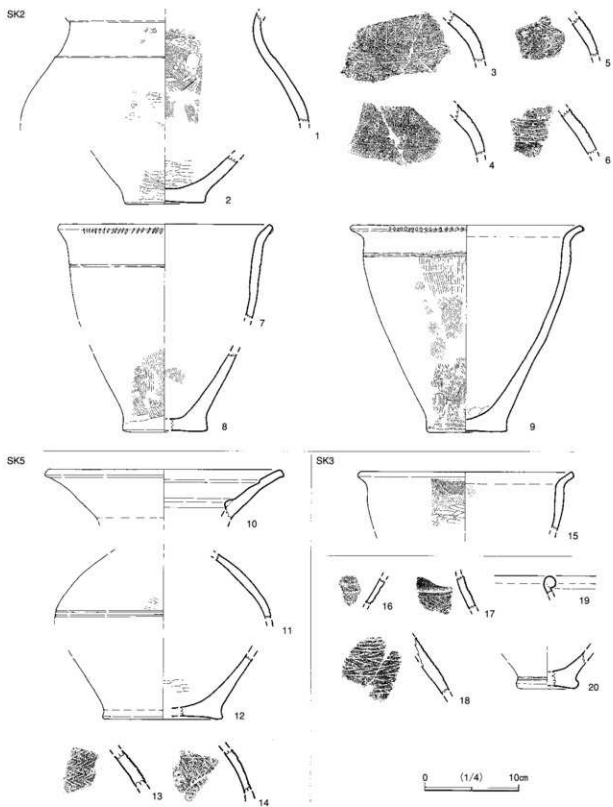
出土遺物は弥生時代遺物と中世遺物に大別でき、このうち量的に最も多いのは弥生時代前期後半の土器である。遺構に伴わない状態で縄文土器片1点が発見されているが、基本的には弥生・中世以外の時期の遺物は出土していない。

a) 弥生時代以前の遺物

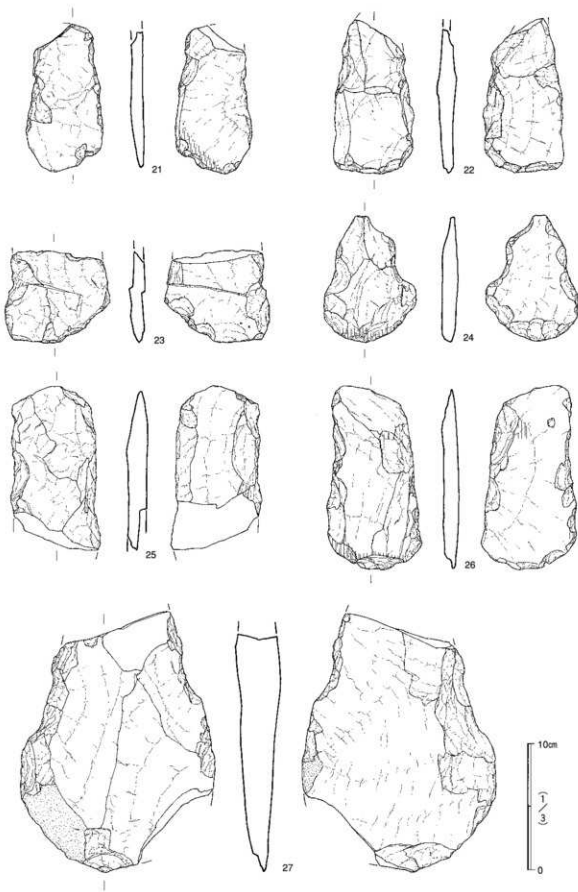
第9図1~15は遺構出土の弥生土器である。いずれも胎土は粗く、器表面が剥落するものが多い。

1~9はSK2から出土した。1~6は壺であり、1と2、3と4は同一個体と考えられる。1は無文である。3・4は肩部に細線により施文される。7~9は甕であり、7と8は同一個体と考えられる。9は口縁部と体部下半で接合しないが図上復原した。両者とも口縁端部に刻目をもち、口縁下部に沈線1条がある。

10~14はSK5から出土した壺である。10は口縁端部に肥厚帯を

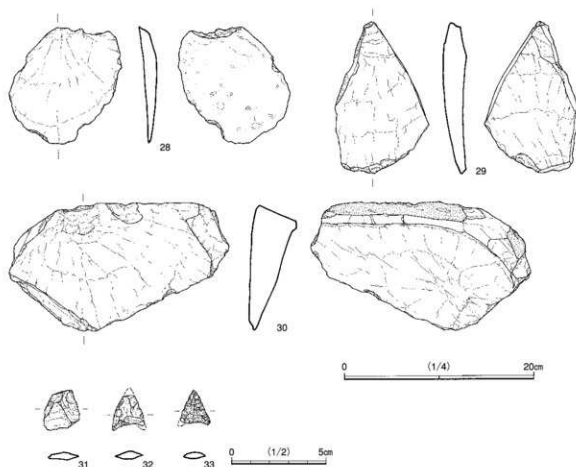


第9図 弥生時代以前の土器実測図



第10図 扁平打製石斧実測図

■は磨滅部分



第11図 剥片・石核・石鏃実測図

らの出土である。いずれも片面には面積の過半以上を占める大きな剥離面が残されている。このことから、製作にあたっては基本的に片面は必要最低限の調整剥離にとどめているとみることができる。21・27には一部に自然面が残されており、転蹠を石材として利用してものとみられる。なお、21・24・26については使用に伴う磨減がみられる。

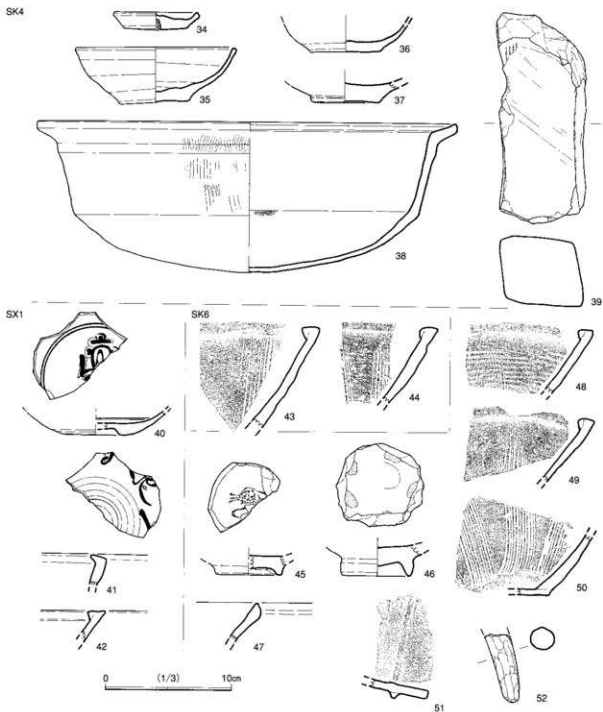
破損の著しい23・25を除いた21・22・24・26・27は、おのおの85g・128g・102g・205g・1120gである。なお、図示したものを以外にも遺物包含層からは10数点の扁平打製石斧折損品が出土している（図版18 54～60）。

第11図28～30は扁平打製石斧の製作過程で産み出された剥片および石核である。いずれも赤色頁岩製であり、28・30は自然面を残す。

31～33は打製石鏃ないその未製品である。31・32は安山岩製であり、SP41から出土した。31は未製品、32は折損品である。33は黒色の黒曜石製であり、遺物包含層から出土した。

b) 中世の遺物

第12図34～39はSK4出土遺物である。34は土師器皿、35～37は土師器杯、38は土師器鍋、39は砥石である。34～37はいずれにもふい橙色を呈し、底部に回転糸切り痕を残す。34の底部外面にみられる小孔は粗砂粒の脱落に伴うものである。38の底部外面は細かいハケにより調整される。これら土器は13～14世紀の遺物と考えられる。39は凝灰岩製の方柱状の砥石であり、4面を使用する。



第12図 中世遺物実測図

40～42はSX1出土遺物である。40は景德鎮系の碁笥底の青花磁器皿、41は瓦質土器鍋、42は瓦質土器插鉢である。いずれも16世紀の遺物と考えられる。図化できなかったものの、この遺構からは美濃焼碗片も出土している。

43・44はSK6出土の瓦質土器插鉢である。16世紀の遺物と考えられる。

45はSP08出土の竜泉窯系の青磁碗である。見込みに印花によるとみられる双魚文をもち、高台内は蛇ノ目軸ハギを行う。13世紀の遺物と考えられる。

46はSP24出土の李朝白磁碗である。見込みに砂目痕が5か所残り、高台内全軸である。16世紀の

遺物と考えられる。

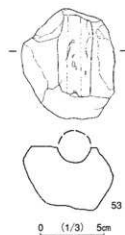
47はSP11出土の東播系須恵器の鉢である。口縁端部外面のみに自然釉がみられる。13世紀の遺物と考えられる。

48は土師器、49・50は瓦質土器鉢鉢であり、16世紀の遺物と考えられる。48はSP17、49はSP30、50はSP31から出土した。

51はSP26出土の瓦質土器であり、火消壺等の蓋とみられる。外面には板目の圧痕がみられる。

52はSP14出土の瓦質土器足銅脚であり、指頭痕および掌痕を明瞭に残す。

53は遺物包含層出土の輪羽口片である。内径は約2.6cmと推定されるが、外径は不明である。



第13図 輪羽口実測図

4 まとめ

今回の発掘調査により、尾袋遺跡（田尻地区）には弥生時代および中世の集落遺跡が存在することが明らかになった。以下、今回新たに得られた知見を、弥生時代と中世の2時期に分けて紹介する。

弥生時代

遺構は前期後半の土器を伴う大小3基の土坑（SK2・SK3・SK5）と柱穴であり、調査区北半部のみが存在する。遺構は礫層地盤の地点を避け、安定した粘土質地盤の地点を選定して掘り込まれている。遺構密度が低いものの、調査区中央部には弥生時代前期の土器を含む遺物包含層が堆積していることから、集落の中心は調査区東方（高位側）に存在すると考えられる。

土坑からは土器とともに赤色頁岩製の扁平打製石斧が出土している。今回の調査区からは土器片1点を除けば縄文時代以前の生活の痕跡がみられないことから、本遺跡の扁平打製石斧は縄文時代遺物の混入とは考えられない。このことから、本遺跡の集落では弥生時代前期後半まで扁平打製石斧が使用されたとみられる。これら扁平打製石斧（石鎌）は農耕具と考えられており、主に畑作に利用されたものとされる。このことは、今回の調査地点が礫層を基盤とする扇状地上にあり、弥生時代において水田農耕に適さない土地であったことに対応するものであろう。今回の調査では弥生時代の土坑に加えて遺物包含層や遺構面を形成する土壌等についても分析を行ったが、残念ながら畑作の確証を得ることはできなかった（付編参照）。

今回の調査で出土した遺物には製作過程で産み出された剥片および石核が存在することから、扁平打製石斧はこの地点で生産されていた可能性が高い。そして、扁平打製石斧の製作にあたっては調査区に隣接する小河川（吉見川）の河床に存在する赤色頁岩の転礫を素材として利用している。赤色頁岩は下関市神田遺跡等の資料から、縄文時代後期には打製石器の素材として利用されていることが知られており、弥生時代の拠点集落である綾羅木郷台地遺跡群や吉永遺跡ほかでも打製・磨製石器に多く用いられている。これまで、これら石器の生産遺跡は確認されていなかったが、少なくとも弥生時

代前期後半に本遺跡で扁平打製石斧が生産されていたことが今回判明したことで、同種遺物の生産・流通といった問題に関して貴重な資料を提供することとなった。

中世

中世の遺構は掘立柱建物跡・土坑・柱穴・集石遺構である。遺構は浅い谷によって隔てられた南北2地点に存在する。北部における遺構分布は、弥生時代と同じく地盤の安定した地点に限られる。遺構密度は低く、復元できる掘立柱建物跡も1棟のみである。土坑(SK4)については、墓の可能性を有する。南部においては比較的遺構密度の高い部分が存在し、南端付近では遺跡の東西への広がりが想定できる。SB3・SB4のように比較的大きい柱穴をもち、建替えが想定できる建物も存在することから、この地点にはある程度継続して人々が居住したことがわかる。しかし、遺物のあり方からみれば、この地域における中心的集落とは考えにくい。

調査区全体として遺物量は少なく、SK4以外では小破片となっているものが大半である。しかしすべてを紹介できなかったものの、遺物の内容のみなら東播系須恵器・備前焼・美濃焼などの国産土器・陶器、竜泉窯系の中国磁器、李朝白磁など、広域流通製品を入手していることがわかる。こうした背景には、調査区東方を南北に通過する赤間関街道(北浦道筋)や、西方1.5kmにあり響灘に向けて開かれた吉見港を経由しての物流が想定できる。こうした地の利から、中心的集落とは考えにくい本遺跡集落もこうした商品の消費地となり得たのであろう。

遺物の示す年代は13～16世紀の幅があることから、この地点および周辺には継続的に集落が営まれていたものとみられる。そして、肥前陶磁器が出土していないことから、この集落は16世紀末の段階には消失していた可能性が高い。

尾袋遺跡 (田尻地区) の土壌分析

応用地質株式会社

1. 試料と分析方法

1.1 試料

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

表 1

試料番号	試 料 名	備 考
1	中央部堆積層① (谷中央北)	砂礫混じり黄灰色シルト
	中央部堆積層② (谷中央南)	砂礫混じり黄灰色シルト
2	北端部礫層① (東)	砂礫混じり黄灰褐色土
	北端部礫層② (西)	黄灰褐色砂礫
3	北端部褐色土層① (西)	砂礫混じり黄灰褐色シルト
4	北端部褐色土層② (東)	砂礫混じり黄灰褐色シルト
5	北区南西端包含層	砂礫混じり黄灰褐色シルト
6	SK 2	砂礫混じり灰褐色シルト
7	SK 5	シルト混じり黄灰褐色土
8	SK 4	砂礫、植物遺体混じり灰褐色シルト
9	SK 3	砂礫、植物遺体混じり灰褐色シルト

今回分析に用いた試料は、表 1 に示す尾袋遺跡出土遺構の覆土 9 箇所より採取した土壌 11 試料である。まず、遺跡の中央部堆積層より採取された試料① (谷中央北、砂礫混じり黄灰色シルト)、試料② (谷中央南、砂礫混じり黄灰色シルト) の 2 点、北端部礫層より採取された試料① (東、砂礫混じり黄灰褐色土)、試料② (西、黄灰褐色砂礫) の 2 点、北端部褐色土層より採取された試料① (西、



砂礫混じり黄灰褐色シルト)、試料②(東、砂礫混じり黄灰褐色シルト)の2点、北区南西端包含層より採取された試料(砂礫混黄灰褐色シルト)1点、SK2より採取された試料(砂礫混じり灰褐色シルト)1点、SK5より採取された試料(シルト混じり黄灰褐色土)1点、SK4より採取された試料(砂礫、植物遺体混じり灰褐色シルト)1点、SK3より採取された試料(砂礫、植物遺体混じり灰褐色シルト)1点の合計11点である。

1.2 分析方法

花粉の分離抽出は、中村(1973)の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加え15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無氷酢酸9:濃硫酸1のエルマン氏液を加え1分間湯煎)
- 5) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。イネ属については、中村(1974, 1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

2. 分析結果

2.1 分類群

産出した分類群は、樹木花粉3、草本花粉5、シダ植物胞子2形態の計10である。これらの学名と和名および粒数を表2に示す。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。

以下に産出した分類群を記す。

[樹木花粉]

マツ属複雑管束亜属、スギ、コナラ属アカガシ亜属

[草本花粉]

イネ科、イネ属型、ナデシコ科、タンポポ亜科、ヨモギ属

[シダ植物胞子]

単条溝胞子、三条溝胞子

2.2 花粉群集の特徴

中央部堆積層

試料①(谷中央北)では花粉密度が非常に低く、ほとんど検出されない。シダ植物胞子のシダ

植物三条溝胞子がわずかに産出する。

試料②（谷中央南）も花粉密度が非常に低く、ほとんど検出されない。樹木花粉のスギがわずかに産出する。

北端部礫層

試料①（東）では花粉密度が非常に低く、ほとんど検出されない。樹木花粉ではマツ属複雑管束亜属、スギが、草本花粉ではイネ科、ナデシコ科、タンポポ亜属がわずかに産出する。シダ植物胞子のシダ植物単条溝胞子がわずかに産出する。

試料②（西）も花粉密度が非常に低く、ほとんど検出されない。樹木花粉ではスギが、草本花粉ではイネ科、イネ属型がわずかに産出する。シダ植物胞子のシダ植物単条溝胞子がわずかに産出する。

北端部褐色土層

試料①（西）では花粉は検出されない。試料②（東）では花粉密度が非常に低く、ほとんど検出されない。草本花粉のイネ科がわずかに産出する。シダ植物胞子のシダ植物単条溝胞子、シダ植物三条溝胞子がわずかに産出する。

北区南西端包含層

花粉は検出されない。

SK 2

花粉密度が非常に低く、ほとんど検出されない。草本花粉のヨモギ属がわずかに産出する。シダ植物胞子のシダ植物単条溝胞子、シダ植物三条溝胞子がわずかに産出する。

SK 5

花粉は検出されない。

SK 4

花粉密度が非常に低く、ほとんど検出されない。樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属がわずかに産出する。

SK 3

花粉密度が非常に低く、ほとんど検出されない。草本花粉のヨモギ属がわずかに産出する。シダ植物胞子のシダ植物単条溝胞子、シダ植物二条溝胞子がわずかに産出する。

3. 花粉分析から推定される植生と環境

中央部堆積層

試料①（谷中央北）および試料②（谷中央南）は、花粉や寄生虫卵などの有機質遺体が分解されるような乾燥あるいは乾湿を繰り返す堆積環境か、堆積速度の速い堆積環境であったと推定される。試料②（谷中央南）ではスギのみが検出されているが、風媒花植物であることから堆積地を含む周辺地域に生育していたと思われる。

北端部礫層

試料①（東）および試料②（西）は、花粉や寄生虫卵などの有機質遺体が分解されるような乾

燥あるいは乾湿を繰り返すような堆積環境か、堆積速度の速い堆積環境であったと推定される。樹木のスギやマツ属複雑管束亜属は風媒花植物であり、堆積地あるいは周辺地域に生育していたと思われる。草本のイネ科、ナデシコ科、タンポポ亜属は人里植物、耕地雑草であり、林縁や日当たりの良い人為性の高い開地に繁茂することから、堆積地周辺は日当たりの良い開けた環境であったのであろう。また、イネ属型がわずかに認められることから、周辺で稲作が営まれていた可能性が示唆される。

北端部褐色土層

試料①(西)および試料②(東)は、花粉や寄生虫卵などの有機質遺体が分解されるような乾燥あるいは乾湿を繰り返すような堆積環境か、堆積速度の速い粗粒堆積物の生成される堆積環境であったと推定される。試料②(東)からはイネ科のみが検出されている。堆積地周辺に生育していたものと思われる。

北区南西端包含層

花粉や寄生虫卵などの有機質遺体が分解されるような乾燥あるいは乾湿を繰り返すような堆積環境であったか、堆積時間が速かったことなどが考えられる。

SK2・SK5・SK4・SK3

いずれの遺構も花粉や寄生虫卵などの有機質遺体が分解されるような乾燥あるいは乾湿を繰り返すような堆積環境であったか、堆積時間が速かったことなどが推定される。SK2からヨモギ属、SK4からコナラ属アカガシ亜属、SK3からヨモギ属がわずかに検出されるが、これらは風媒花植物であることから、堆積地周辺に生育していたと思われる。SK5は花粉等の有機質が分解されるような乾燥あるいは乾湿を繰り返すような堆積環境であったと考えられる。

4. まとめ

尾袋遺跡の中央部堆積層、北端部礫層、北端部褐色土層、北区南西端包含層、SK2、SK5、SK4、SK3について花粉分析を行った。いずれも花粉が検出されないか検出されても微量であることから、花粉・胞子や寄生虫卵などの有機質が分解されるような乾燥あるいは乾湿を繰り返すような堆積環境であったか、堆積速度の速い環境が推定された。わずかに検出されたマツ属複雑管束亜属、スギ、コナラ属アカガシ亜属の樹木とイネ科、イネ属型、ナデシコ科、タンポポ亜科、ヨモギ属、シダ植物(胞子)の草本は、ほとんどが風媒花植物であり、堆積地周辺ないし周辺地域に生育していたとみせる。

<引用・参考文献>

- 金原 正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p.248-262。
- 島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集、60p。
- 中村 純 (1973) 花粉分析。古今書院、p.82-110。
- 中村 純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として。第四紀研究13、p.187-193。
- 中村 純 (1977) 稲作とイネ花粉。考古学と自然科学、第10号、p.21-30。
- 中村 純 (1980) 日本産花粉の標徴。大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p。

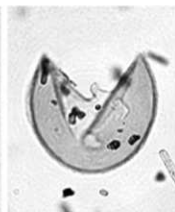
表2 尾袋遺跡における花粉分析結果

学名	分類群	中央部堆積層		北端部礫層		北端部褐色土層		北区内西端包含層	SK2	SK5	SK4	SK3
		①(含中央北)	②(含中央南)	①(東)	②(西)	①(西)	②(東)					
Arboreal pollen	樹木花粉											
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属短維管束亜属			1								
Cryptomeria japonica	スギ	1		2	1						1	
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属											
Nonarboreal pollen	草本花粉											
Gramineae	イネ科			2	3		2					
Oryza type	イネ属型				2							
Caryophyllaceae	ナデシコ科			1								
Lactucoideae	タンポポ科			1								
Artemisia	ヨモギ属								1			1
Fern spore	シダ植物胞子											
Monolate type spore	単条溝胞子			1	1		3		2			3
Trilate type spore	三条溝胞子	1					2		1			1
Arboreal pollen	樹木花粉	0	1	3	1	0	0	0	0	0	1	0
Arboreal·Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	0	0	4	5	0	2	0	1	0	0	1
Total pollen	花粉総数	0	1	7	6	0	2	0	1	0	1	1
Pollen frequencies of 1cm ²	試料1cm ² 中の花粉密度	0.0	0.8	4.9	5.6	0.0	1.4	0.0	0.9	0.0	0.8	0.8
			×10	×10	×10		×10		×10		×10	×10
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0
Fern spore	シダ植物胞子	1	0	1	1	0	5	0	3	0	0	4
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion remains	明らかでない消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物	(-)	(-)	(-)	(-)	(+)	(-)	(-)	(+)	(+)	(+)	(+)

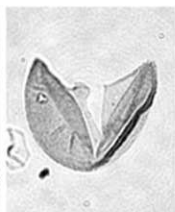
尾袋遺跡の花粉・胞子



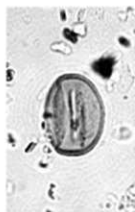
1 マツ属複雑管束亜属



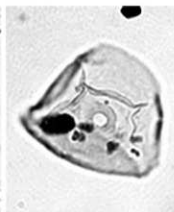
2 スギ



3 スギ



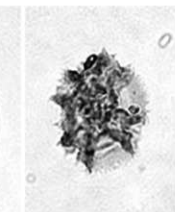
4 コナラ属
アカガシ亜属



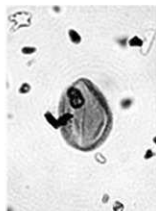
5 イネ科



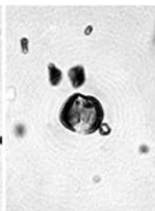
6 イネ属型



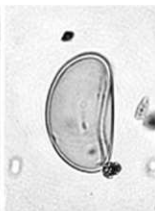
7 タンポポ科



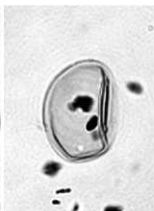
8 ヨモギ属



9 ヨモギ属



10 シダ植物単条溝胞子



11 シダ植物単条溝胞子

— 10 μ m